

藻場の再生を図って沿岸漁業を復活させたい

大根占藻場保全会

大根占地区について

大根占地区は、鹿児島県大隅半島の南西部に位置する錦江町にあり、鹿児島湾に面す。

錦江町は、桜島や開聞岳を望む絶好のロケーションにある。また、西日本最大級の照葉樹林帯や花瀬川の千畳敷、神川七滝など自然豊かで、こうした自然環境を活かしたトレイルランが現在注目されている。



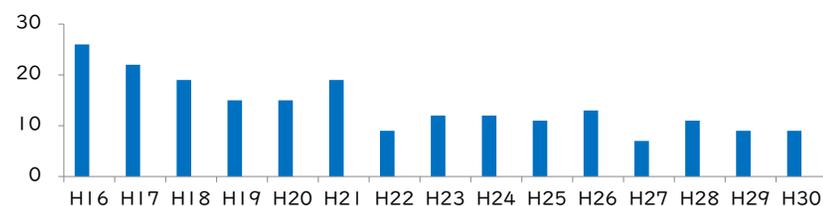
沿岸環境の現況

町の産業は、農林水産業を中心としており、特にお茶や畜産、甘藷などの農業が基幹産業となっている。漁業は、カンパチやヒラマサなどの養殖業が盛んで、総生産量の9割強を占める。一方、一本釣りや延縄、ゴチ網、建網などの漁業が沿岸域で季節に応じて営まれているが、その生産量は近年、激減している。

かつて地区の沿岸には、藻場が広がっていた。しかし、1970年代初めに藻場がほとんど消滅し、それに併せて沿岸漁業の生産量も減少。加えて、漁業者の高齢化によって組合員が減少し、生産量がさらに落ち込み、養殖業への依存が高まった。

水産資源を育む藻場は、多様な漁業種類で構成される地区の沿岸漁業にとって貴重な生産基盤の一つである。その再生は、養殖業に依存する地区の漁業の現状において喫緊の課題となっている。

沿岸漁業生産量 (ton)

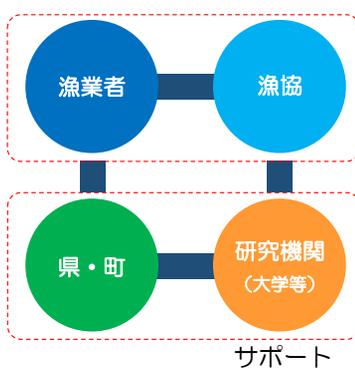


組織の設立及び活動方針

当組織が活動する区域の大半は砂地。また、海岸線に離岸堤が複数設置されている。そこで、平成25年度に「大根占藻場保全会」を設立し、これら離岸堤とその岸側の静穏域を利用して、藻場の再生を図ることにした。

組織の体制は、漁業者が主体。鹿児島大学の藻場を専門とする教授のサポートを得ながら取り組みを進めている。

活動組織



藻場の再生を目指して

(1) 大型海藻類の着生・繁茂を促す

海岸線に複数設置されている離岸堤のブロックや捨石帯を活用して、大型海藻類の着生・繁茂を図っている。

離岸堤周りにはウニ類が高密度で生息することから、その除去を行う。また、除去エリアの一部にホンダワラ類の種苗ブロックを投入し、それを核に大型海藻類の着生・繁茂を促す。

ウニの除去は、フーカー潜水や素潜り、また船上から視突き方式で実施。除去の方法は、自作の「ウニ潰し棒」でウニ類を潰す。活動時期は7~2月で、ウニ類の生息密度が高い場所を絞って集中的に除去する。

種苗ブロックの投入は、鹿児島県豊かな海づくり協会で生産されたブロック約40~50個を、12月頃に離岸堤周りに船上から投入している。



(2) アマモ場の造成

離岸堤の岸側には、砂泥底の静穏域が形成されている。それを利用してアマモ場の造成を進めている。

造成は、播種法で行う。播種の方法は、せんべい状に成形した紙粘土にアマモの種をまんべんなく軽く埋め込み行う。播種の時期は10~11月。船上から投入し、その後潜水で整形するようにしている。



活動の効果と課題

直近4ヶ年のホンダワラ類とアマモの被度を、下図に示す。

ホンダワラ類の被度は平成30年まで順調に増加し、一定の成果を得ることができている。一方、アマモについては、未だ低い水準で推移するが、単年でパッチ状に分布したり、高密度で繁茂する年が認められたりするようになってきている。

今後も、活動の成果を鹿児島大学の先生と確認しながら、方法の改善等を検討し、取り組みを進めていきたい。そして、藻場の再生と沿岸漁業の回復を図っていきたい。

